

地域連携クリティカルパスの 電子化における現状と課題

松本 武浩[†]第67回国立病院総合医学会
(平成25年11月8日 於金沢)

IRYO Vol. 68 No. 9 (457-460) 2014

要旨

急性期病院の在院日数減少は病院完結型から地域完結型医療への移行を加速化させており今後ますます地域連携の重要性が増してくるものと思われる。このため地域連携クリティカルパス（以下地域連携パス）の価値も高くなってくると思われるが、構築は容易でなく全国で十分に普及しているとはいえない。地域連携パスの電子化については Microsoft Excel や Filemaker Pro で作成した地域連携パスシートを医療機関間で共有する取り組みが報告されているが、現時点でこのような電子化運用は一部の地域に限られておりさらに広がっていない。地域連携パスが複数施設間の取り組みである以上、院内クリティカルパスより構築が難しいのは当然であるが、地域連携パスの本来の目的は医療の品質改善である点が十分に理解されていない点も一因と考えられる。電子化した地域連携パスを有効に活用するためには、インターネットに接続されたPCを日常診療の中で利用する環境が必要と思われる。つまり ICT (Information Communication Technology) を使った医療ネットワークが先行して構築される必要があると思われるが、このようなネットワーク上に地域連携パスが構築できればクリティカルパスの品質管理手段であるアウトカム評価やバリエーション分析のためのデータ収集および分析が容易となり、地域連携パスによる品質管理の理解が進むものと思われる。地域医療 ICT ネットワークの構築は国が支援していることもあり全国各地に徐々に広がりつつある。医療の主体が地域に変わっていけば、医療品質管理の主体も地域医療に変わっていく可能性がある中、その最も有効なツールが地域連携パスであり、品質管理手法として電子地域連携パスが担う役割は大きいものと考えられる。

キーワード 地域連携パス, 電子地域連携パス, 地域医療 ICT ネットワーク

はじめに

厚生労働省が毎年実施している「DPC 導入の影響評価に関する調査結果」によれば、最も平均在院

日数が長いとされた大学病院等の特定機能病院が多くを占める2003年度 DPC 導入病院群であっても、2003年度は19.7日であった平均在院日数が、2010年度には15.7日と7年間で4日短縮している。その他

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 医療情報学 [†] 教員
(平成26年3月12日受付, 平成26年6月20日受理)

Evaluation of the Electronic Liaison Critical Path
Takehiro Matsumoto, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

(Received Mar. 12, 2014, Accepted Jun. 20, 2014)

Key Words: liaison critical path, electronic liaison critical path, regional ICT network